

# 社会科教育

奈良県小学校教科等研究会  
社会科部会  
第75号

## 第63回奈良県小学校 社会科研究大会

平成28年11月25日 明日香小学校

「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」を大会主題とし、明日香小学校で県大会が行われました。明日香小学校では、郷土学習プログラムを作成し「探求・発見・発信」を学習過程として研究を進めてこれらています。

郷土を知り、愛し、誇りをもち、  
語れる子ども

幼稚園の「地域活動」、小学校の「あすか科」、中学校の「明日香学」と系統だてた学習活動を行い郷土学習に取り組みされており、公開授業でも二年生は新しく完成した「四神の館」の見学、三年生は地域に伝わる昔からの行事、四年生は明日香法に一つ付け足しをすることを考え話し合う授業、五年生は、地域の朝市を入り口にして、「これからの食料生産」の単元を貫く学習問題をつくる授業、六年生は村内で空襲があったことなど地域に残る戦争に関連した事象を調べながら十五年戦争をより身近に感じることができた工夫をした授業であった。

地域学習から、奈良県や日本

全体の社会科の学習へと広がっていくことが大切である。そのためには教師が自分の校区について学ぶことが大切であると明日香小学校の取組から改めて気づくことができる大会であった。

奈良県教育委員会谷聡先生の記念講演の中で、新学習指導要領についてお話があった。今回の改訂では、何を学ぶかという指導の内容の見直しに加え「何ができるようにするか」「どのように学ぶか」という視点で改善が進められていることと。学ぶ本質的な意味を明確にするため教科ごとの見方・考え方は何かを示していること、アクティブラーニングの3つの視点から学習過程の質的な改善も求められていることなどお話を伺うことができた。また、県小教研のこれまでの研究成果をさらに深めていってほしいとお言葉をいただくことができた。来年度の10月26日、27日、本県で開催する第55回全国小学校社会科研究協議会研究大会にむけても着実に社会科授業の実践研究を深化させ、指導法の開発、普及に努めていきたいと考えています。

「よりよい社会の形成に参画する力」を、道具の移り変わりと人々のくらしの変化について理解すること、道具の変化の裏には人々の願いが存在すること、理解すること、よりよい生活を実現すること、よりよい生活の道具があるか考えること、社会に参画する力が育つと考えた。

### 学年別分科会での 研究協議の概要

#### 3年分科会

かわってきた人々のくらし  
―昔の道具と昔のくらし―  
奈良市立西大寺北小学校  
教諭 田中 雅代

#### 【本実践における提案】

「よりよい社会の形成に参画する力」を、道具の移り変わりと人々のくらしの変化について理解すること、道具の変化の裏には人々の願いが存在すること、理解すること、よりよい生活を実現すること、よりよい生活の道具があるか考えること、社会に参画する力が育つと考えた。

また、実感を伴う理解を図ることを目的とし、洗濯板等の体験的な活動を取り入れた。実際に触れる中で共感的な理解を得ることができた。人の営みに学ぶために、ゲストティーチャーに、当時のくらしについてのお話を聞いたり、お家の人に「昔と今、どっちが過(こ)しやすい？」とインタビューを行い昔と今を比較した。また、道具は、どのように移り変わっていったのかを、絵年表を作成し人々の願いに気付かせ、豊かで便利な生活を願ってきた人々の生き方を共感的に理解できるよう学習を進めた。

ねり合いでは、「昔と今、どつ



分科会での提案のようす

ちに住みたい？」と問い、将来どんなくらしを送りたいかを考えた。「ひろげる」段階では、「未来にあったらいいな」と考える道具を発表させる場を設定した。評価については、指導と評価の一体化を図るために、学習後に振り返りを記録させ、指導の見直しをするなどの手立てを講ずることができた。また、体験的な学びを取り入れたことで、児童がいきいきと学習に取り組む、自分ごととして表現することができていたと考えられる。

#### 【研究協議から】

・みつめる段階で、先生自身が少しひいたところ所から体験活動に関わっていた意図について↓「これはこう使(もち)うんだよ」ではなく、子どもが自分でやってみることで自分なりの根拠に依拠(よ)ることができると考えた。・なぜ、時代の流れによって道具が変わったのか？をねり合いの発問に設定しなかったのか。↓単に、今のくらしを肯定的にとらえるだけでなく、物質的

な豊かさという「今のよさ」と、精神的な豊かさという「昔のよさ」のそれぞれを引き出したいという思いがあった。

・昔の子どもの生活にだけ視点をおくのではなく、昔の親(母)の生活は、昔の道具から新しい道具にうつりかわってどう変わったのかを押さえておけばよかったのではないか。

・今の生活は、昔の人々が願っていた生活になっているのかを問うのも面白いと思う。

**【指導助言】**  
王寺町立王寺南小学校  
校長 山田 均先生

・次期学習指導要領を視野に入れた体験活動を重視していくことは大切であるが、何のためにこの体験活動を行っているのかを見失ってしまうことがよくある。体験活動は、目的ではなく手段であることを忘れず実施する必要がある。

・本単元は、小学生で初めて歴史を扱う単元で、歴史の入り口であるので、時間認識をしっかりとつかませたい。ここで培った力が、今後、郷土の開発の単元、歴史の学習へつながる。

・評価について、私たち教師は、何のための評価をしているのか考えなければならぬ。今回の実践では、子どもの振り返りを見取り、形成的な評価をしている。これは、自分の指導を見直すという目的での評価であった。つまり、指導をするための作戦基地の役割を担っていた。見取っていく中で、記述が不十分

だった子にはどのような手立てが必要かなど、次の指導につなげていく評価をしていくことが指導と評価の一体化である。

・今、社会科で学んでいることが、大人になっても関心が薄れることなく自分の問題としてとらえ続けることができるのか。民主主義は、権利を行使することと同時に責任を果たす(社会の形成に参画する)ことが大切である。子どもからすると遠い目標だが、そういう大人を育てる礎になっている。その役割を教員が担っているという意識をもつことが大事である。

・アクティブラーニングという言葉が出てきているが、きちんと分かったことをもとに考えるから、「考える」になる、単に思いついたことだけを言うだけでは駄目である。これからの時代は、汎用性のある知識が大切で北俊夫先生が言う、マスターキーの学力が求められる。どこにでも使える知識を、子どもに獲得させるかが今後の課題である。

(秋津小学校 森戸 徹)

**4年分科会**

水害からくらしを守る  
—大和川と葛下川の流れるまち王寺町—  
王寺町立王寺小学校  
教諭 立部 秀樹

**【本実践における提案】**  
「学習問題を解決していく過



授業のようす

程で新たに見つけた課題を「ねり合い」により解決しようとする。よりよい社会の形成に参画する力を育てることにつながる。」という研究仮説に基づいて、本実践を展開した。

「確かな教材作り」では、災害の中から水害を選択した。王寺町は、昭和57年に水害によって甚大な被害を受けた過去がある。児童が住む地域を舞台に学習を進めることで、水害を自分ごととして捉え、興味・関心をもって学習に向かうことができる教材ではないかと考えたからである。

「ねり合いの重視」では、「王寺町が水害からより守られたまにしているためにはどうしたらよいだろうか。」と、ねり合いのテーマを設定した。既習事項を根拠に、役場や消防、地域など、多面的な視点から解決策を考えることができることを考えたからである。また、ノートの交流による考えのやりとりによって、児童の考えの幅を広げる手立てとした。

「学びに生きる評価」では、毎時間の振り返りによる形成的評価を行った。児童の学習状況を、小まめに見取るためである。また、社会の形成に参画する力がついたかどうかを把握するために、ルーブリックを用いて、児童の記述や発言から評価を行った。

**【研究協議から】**

- ・ふかめるからひろげるへのつながりが、実にスムーズである。
- ・火災を取り扱う実践が多い中で、あえて水害を取り扱うのは、地域の実体をよく見極めた上での実践であると感じた。また、4年生に合う教材や資料を、上手く選択していることが見事だ。
- ・「役場の視点」「消防署の視点」という児童の考えは、何を根拠に出してきたのか。
- ・テーマ毎に新聞を作らせた。テーマ毎に深く調べ学習を行ったので、その過程で、児童が様々な人の視点をもつことが出来た。
- ・今回のねり合いのテーマ設定では、児童が今まで調べてきたこと以上のことを考えなければいけない。調べてきたことを根拠としたねり合いが展開できると良いのではないか。
- ・オープンエンドな課題設定になった。意見を突き合わせて、ねり合わせるのが難しかった。
- ・5年生の実践でも「自助・共助・公助」を取り扱っている。4年生と5年生では、防災を学習するうえで、どのような違い

があるのか。

↓「自助・共助・公助」を、4年生にわかる言葉に置き換えて紹介した。4年生では、自分の住む地域(市町村や県)の防災を学ぶ。そのことが5年生との違いだと考える。

・中心概念に「関係諸機関の連携」とあるが、児童はどのように学んでいったのか。

↓ゲストティーチャーに、「連携」を意識して話してもらえよう、事前に打ち合わせをした。しかし、中心概念に迫れたかどうかは検討の余地がある。

**【指導助言】**  
奈良市立鼓阪北小学校  
校長 大西 康仁先生

・中学年では、ノートの書き方やインタビューの仕方など、児童に学び方を学ばせ、学習技能を身につけさせることが大切。

・昭和57年の水害と平成25年の水害の写真を比較させることで、うまく学習問題をつくっている。昭和57年の水害の写真がカラーで鮮明なため、平成25年の水害と比較しやすく、非常に有効な資料となっている。

・ねり合いの場面をゲストティーチャーに見てもらい、児童の考えや意見に対して、その場で批評してもらうことも出来たのではないか。

・学習の対象とする範囲が、自分たちの住む地域よりも広がる4年生では、ゲストティーチャーを見つけていることが困難になる。授業で取り扱う地域の学校に問い合わせ、紹介をして

もろうことも、ゲストティーチャーを見つける上で有効な方法である。  
(郡山西小学校 島 俊彦)

### 5年分科会

国土の環境を守る

—自然災害から人々を守る—

榎原市立晩成小学校

教諭 本多 俊道

#### 【本実践における提案】

日本で起きる災害が私達に大きな影響をおよぼしていること、防災や減災の取組に対して多くの人々が工夫や努力をしていることを学習した。市役所の方から過去にあった災害やそれに対する取り組みを聞き、「私達は自然災害に対して、安心して暮らすことができるだろうか。」をテーマにねり合うことで、災害、防災・減災と自分とをつなげて考えることができる児童を目標とした。

実践では、災害に焦点を当てた。災害の映像はメディアで発信されることが多いが、児童の多くは他人事のように考えていると思われる。そこで、災害、防災・減災を身近に感じられるようにするために二つの活動を重視した。一つ目は、グループ活動である。調べた情報を、グループごとに発表し合い、お互いの情報を共有できるようにした。これにより、自然災害が生活に及ぼす影響を知り、自



分科会での提案のようす

身の生活に危機感をもつのではないかと考える。二つ目の活動は、榎原市役所の危機管理課の方をゲストティーチャーに招いて話を聞くことである。この中で、自助・共助・公助の話聞き、地域の防災・減災の取り組みには多くの人々が関わっていることを知る機会になると考える。また、防災・減災のためには設備面だけでなく、多くの人々の協力が必要であり、自ら協力しようとする児童を育てる教材であると考えた。

し合い後自分の考えを振り返り、まとめることで、児童は自らの学びの深まりを自覚できると考える。  
この取り組みの成果としては、毎時間振り返りを書かせていたことで、児童の考えの変容が追えた。それにより、災害が他人事から自分のこととして考えられるようになってきたことがわかった。  
【研究協議から】  
・4年生の学習と非常に繋がりが深く、学習が進むにつれて、内容が地域に入り込んでいっている。  
↓児童は、ニュースで災害について聞くこともあるが、他人事のように感じているので、自分と関わりの深いことであると感じさせたかった。  
【指導助言】  
生駒市立生駒小学校  
校長 山中 賢司先生  
・「自助・共助・公助」身近なことと全国的なことを兼ねて調べているところが良かった。順を追って子供たちの学びを深めていったことで、他人事が自分のこととして考えることができた。  
・細かく学んだ中で安心だと感じる児童もいれば、不安を感じる児童もいる。ねり合いでは、パーセンテージで示したことから、相手が不安だと思ってしまうことへの話し合いもでき、考えを深めることができていた。  
・社会科の楽しみは、不確かなものや曖昧な言葉をはっきりさせることも一つなのではないか。

### 6年分科会

天下統一への道

—筒井順慶と布施城からみる

葛城市立新庄小学校

教諭 宮城 修斗

#### 【本実践における提案】

本小単元では、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人の武将による活躍を調べ、江戸幕府が約二六〇年間の安定した世の中を築き上げることができた礎を学習する。その際、三人の武将だけではなく、地域の出身者である筒井順慶も取り上げ、身近な地域の歴史と中央の歴史を結びつけながら学習して知識を獲得していこうとした。そして、「四人の武将のうち、家臣につきたいのは誰か」というテーマでねり合い、自分ごととして考えることで歴史を身近に感じるとともに、地域に誇りをもつことによつて、よりよい社会の形成に参画する力を育てていこうとした実践である。

【研究協議から】  
・地域教材を扱うという視点は

おもしろい。ただ、もう少し子どもたちに体験させて肌で歴史を感じさせてもらいたかった。  
・屋敷山公園がそばにあるにも関わらず、布施城を教材に据えた理由はあるのか。  
↓布施城について子どもたちの認知度が低いことと、屋敷山公園は江戸時代の遺跡であり、戦国時代の学習には適していないためである。



授業のようす

・身近な歴史を教材にすることができ、よかった。地域史と中央史とのつながりが出てくると、より意欲的に学びが深まったと思われる。  
・ねり合いのテーマだが、今の子どもたちと当時の人たちでは選び方が異なってくる。指導者は子どもたちにとってどのような視点で選べたのか。  
↓人物を選ぶ際には、根拠を大切にしたりしたため、あまり視点を指定しなかった。

【指導助言】

大和郡山市立郡山西小学校

校長 北村 善重先生

・身近な教材を用いて単元を構成していったくれたことはよかったです。奈良には、山城が二百以上あり、奈良だからこそ教材にできることは多い。だから、子どもたちと見に行つて感じてもらいたい。

・ねり合いのテーマについて、今回の実践においては、四人の武将の年齢を子どもたちに把握させる必要があった。戦国時代の武将が一族の繁栄を願っていたことを児童が捉えていければ、ねり合いの姿も変わっていったのではないか。また、テーマについても、「自分が家臣になりたいのは織田信長と筒井順慶のどっちか。」としてみてもおもしろかったのではないか。学習を進めるにあたっては、人物の働きを中心に調べ、時代の特徴や人物の生き方について説明できるようにすれば、郷土愛にも繋がっていく。

(あすか野小学校 佃 拓也)

全国・近畿大会に参加して

第54回全国小学校社会科研究協議会研究会に参加して

奈良市立都跡小学校

教諭 山方 貴順

十月二十日と二十一日に開催された全小社研名古屋大会の二日目に参加した。大会主題は「と

もに生き合う社会を目指す子どもたちの社会科学習」〜協働から参画を志向して〜」である。名古屋社研では、主題を踏まえ「協働から参画を志向する姿を引き出す三つの工夫」を打ち出していた。

一 子どもが社会とつながる教材

二 子どもが社会へのかかわりを見つめる学習過程

三 子どもが社会への理解を確かなものにする学習活動

以上の工夫を踏まえ、次の三つの小学校が会場校として、公開授業と学年別授業研究会を行った。校区に白鳥御陵や源頼朝誕生の地といわれる誓願寺を含み、窓から熱田神宮を望むことのできる白鳥小学校、同じく窓から熱田神宮を望むことができ、熱田神宮の祭事に奉納する御土器を作っていた地区を校区に含む御器所小学校、JR名古屋駅を校区に含み、名古屋市の統合校であるほのか小学校である。三校ともそれぞれに特徴のある小学校である。私は、第一会場である白鳥小学校の学年別課題研究会にて、実践提案を行った。

奈良県小社研四年生部会として提案した単元は「ごみの処理と利用」〜奈良市がごみであふれない理由〜」である。本実践における提案点は大きく二点ある。一点目は、市民の立場のみでなく、市政の立場からごみ問題を捉えたことである。市民と市政、複数の立場からごみ

問題を捉えることを、本単元の社会的な見方・考え方と捉えた。二点目は、学習評価に重点を置いたことである。適切なねり合いになるよう、毎時の振り返りの記録を取り、児童が獲得した知識が不十分な箇所については発問を追加した。また、ルーブリックを作成し、児童の思考力を評価したことで、年間を通して、思考力を高められるようにした。

参加者からは、「本県と似ている点がある。構造図の作成や、評価である。」や「丁寧な振り返りを見とること、発問を追加した点が良い」といった、肯定的な声がかかれた。一方で、本単元は「ごみの処理と利用」であるにもかかわらず、利用という点についての指導は不十分ではないかとの指摘もいただいた。今後は、ごみの処理だけでなく、ごみの利用についても研究を深めていきたい。

指導助言は広陵町立広陵北小学校、西井康浩校長先生よりいただいた。学習指導要領をもとに行政に目を向けた点や、社会的事象に対して多面的、多角的というキーワードを踏まえている点が良いとのこと指導をいただいた。

第63回近畿小学校社会科教育研究協議会兵庫大会に参加して

奈良市立飛鳥小学校

教諭 上田 尚史

平成28年10月14日第63回近畿小学校社会科教育研究協議会兵庫大会が神戸市立蓮池小学校で開催された。大会主題は「未来につながる社会科学習」自ら問い続け、豊かにかかわり続ける力」である。

兵庫県小学校教育研究会社会科部会は、友達の様々な見方や考え方に気付き、豊かにかかわる以上の過程から「人と人とのつながりに目を向け、地域社会に愛着と誇りをもつ子・人の生きる姿に学び、社会の一員として考える子」に成長する子供の姿を目指している。

研究の視点としては自ら問い続ける力(社会的事象に対して自分から疑問をもち、解決していく力・事実を丹念に読み取り、自分なりに考える力)豊かにかかわり続ける力(人と豊かに関わることで新しい考えと出会い、比べたり統合したりすることによりよい考えへと深化させていく力)の二点を掲げ授業実践や研究発表が行われた。公開授業では子供たちが教師の発問にしっかりと考え発表しているようすがあった。どの学年の教材も地域の素材を生かし神戸らしい授業が行われており社会的事象を自分ごととしてとらえることができているように思う。黒板を3分割して使っていると、ころや板書案をカラーの写真で用意し教師が授業をしていたり、教師が単元に20ページ程の資料を作成していたりと、大変熱心に授業作りが行われていた。



公開授業のようす

学年別研究協議会では奈良県小社研六年部会の提案として「人とつながり、共に学びあい追究し創り上げる学習活動」〜「世界に歩み出した日本」の学習を通して〜の実践報告をした。参加者からは関連図を用いたねり合いのあり方や、指導の展開・評価、また、学びを通して「よりよい社会に参画する」子供たちの姿について質問が出された。指導助言の平群小学校稲浦聡校長先生からは、ねり合いに関連図を活用することで児童の考えのよりどころとなり自分の考えに自信をもち発表することができると。しかし、関連図がねり合いの終着のように考えるとねり合いの本質とは異なるのではないだろうか。つまり、関連図をねり合いの一つのツールとして活用するのがよいのではないかと指導いただいた。